

令和８年度 狭山市環境審議会 会議録

開催日時 令和８年７月２７日（月） 午前１０時００分～午後０時００分
開催場所 狭山市役所 ７階 職員研修室
出席者 小口委員、大貫委員、安藤委員、小久保委員、澤田委員、中津川委員
豊泉委員、奥富委員、吉田委員、吉野委員、下田委員、北田委員
（欠席者 ３名）
狭山市 久保田環境経済部長、北田環境経済部次長兼環境課長
（事務局） 諸口主幹、三塚主任、黒田主事補
コンサル 株式会社環境総合研究所 寺山、菊池、野口
傍聴者 なし

会議の経過

１ 開 会

２ 委嘱状の交付

３ 環境審議会委員及び事務局職員の紹介

４ 議 事

（１）２０２６年度版（２０２５年度実績）狭山市環境レポートについて

（２）第３次狭山市環境基本計画改定版について

議事（１）、（２）について、配布した資料に基づき事務局より説明した。

<質疑応答・意見>

委 員 市民への環境啓発についての取組としては、子どもたちに無駄のない食生活などを伝えている。体験したことを保護者に伝えることで、家庭にも浸透していくことが期待できる。これからの環境を担うのは子どもたちだと思うので、子どもたちを巻き込んだ取組があると良いと考える。

委 員 先日、児童館で開催された天体望遠鏡を使用したイベントに参加した。子どもと保護者が一緒に参加することで一体感が生まれ、イベントとして良いものを感じた。これからの環境について、子どもをはじめとして市民を巻き込んで取り組んでいかないと発展しないのではないかな。

委 員 町内会の梅畑が伐採され地面にシートが張られ、線路脇等の芝もシートが張られている光景を目にする。現在は時代が変わり、人材も減少したためか環境よりも効率化が重視されているように感じる。狭山市だけの問題ではないだろうが、効率化という名目のもとに大きな意味で環境破壊になっている側面もあるのではないかと感じている。

委 員 改定版の作成にあたり、より市民にわかりやすい計画、また市民・事業者・行

政の役割を明確化するとあるが、専門家の目線から、その考え方や方針は時代に沿っているものか伺いたい。

コンサル 環境基本計画はどこの自治体でも比較的認知度が低いと認識している。そのうえで、関心のない方にも手に取っていただきたいと私どもも思っており、市と協議し作成を進めていきたいと考えている。手に取ってもらえるようなインパクトのあるデザインや、分かりやすいレイアウトを目指していきたい。主体の明確化については、現行の計画では事業者による取組の情報が少ないが、市民の行動に対して温暖化対策に係る取組は掲載されている。これはどこの自治体にも共通することで、市民・事業者・行政それぞれが、目標の実現に向けてどのような取組が必要かという意味で、掲載は必要だと考えている。

委 員 事務局の説明において、現状に即さなくなった施策や取組を見直して削除する、5年を目途に取組を見直すというのは、専門家の方から見てもこの機会は有効なのでしょうか。

コンサル 市役所も会社と同じ事業体として考えることができ、環境分野の事業計画に取り組むうえでPDCAを回し、それに基づいて施策や目標の見直しを行うことは有効だと考える。

委 員 環境審議会には様々な立場の委員が参加しているが、ここでの意見が次の改定に反映されるということでしょうか。

コンサル ご意見を整理して、市と協議しながら進めたい。

委 員 こういった市の計画を市民に浸透させることは難しいと感じている。関心がある人とそうでない人との差がある。そういったところにどのように入っていくかが課題。計画を子どもでもわかるようにかみ砕いて学校に配布したり、総合学習の時間で題材にしたりすることも有効ではないかと考える。

委 員 社内で環境への取組を進めているが、関心が持てず結局担当している部署だけが取り組んでいるような状況が見受けられる。そこで、取組の意味、何のためにやっているか、取組によってどのような効果があるか、いずれ自分たちの仕事に繋がってくるというような、前向きにとらえてもらえるよう説明をしている。こういった市の取組についても、市民の生活がより豊かになるとか、蓄電池によって災害時の安心につながるだとか、生活に直結するようなイメージを持ってもらえるよう工夫することはどうか。

委 員 環境基本計画は専門的な内容も大事だが、まず手に取ってもらう、その取組は今回素晴らしいと感じた。

委 員 子どもの教育についてこどもエコクラブの取組を進めている。もっと若い世代に環境に足を突っ込んで欲しい。環境レポートについて、行政としてどんな課題を持っているか明確にし、市民に協力を求めていくよう語り掛けるとわかりやすいのではないか。

また、環境に関心のある方もいる。そのような方へのアプローチとしては、指標、数字がわかりやすい。そこから自分事にかみ砕いて考えることができる。やりたいこと、目的がより市民に伝わりやすい内容も重要ではないか。

委員 市との連携の中で、市の制度を事業者にも活用してもらえるよう活動している。環境に対する関心は高まってきていると思うが、どこか他人事のような、「自分の会社だけはいいいや」というような意識を捨てきれていない部分も多少あると感じるため、自分事として取り組んでいけるように周知するなど、市民の方へお伝えできるようにしたいと考えている。また、改定版が出来上がった時には、課題解決と一緒に取り組んでいきたいと考えている。

委員 環境配慮の一環として弊社では地産地消の推進としてうなぎ養殖や、耕作放棄地を活用したお米の栽培に取り組んでいる。県内にうなぎ屋はたくさんあるが、埼玉県産のウナギはない。お米は昨年 40 t ほど収穫し、協力会社等に流通させている。

委員 国は SDGs ではなく、これからは SWDs だと提唱している。これまでの経済発展を大切にという考え方から、ウェルビーイング、つまり質の良い生活、人間にとって精神的・身体的にも社会的にも健康な状態を目指すという方針がとても良く、今回の改定に盛り込まれていることもよいと思う。これからの担う子どもたちにアプローチする視点はその通りだと思った。しかし、多くの高齢者が生活している現状があるため、高齢者も大切にしなければならないと考える。高齢者から子どもたちに継承する取組があると良い。

健康は皆が注目する視点だと思う。カーボンニュートラルやサーキュラーエコノミー等の国の方針を、健康というキーワードを視点に説明していくことが効果的ではないかと考える。また、高齢者は新しい言葉には馴染みがないかもしれないが、もったいない精神とか、昭和の時代から身について生活していることもあり、馴染みのある言葉に置き換えて紹介してはどうか。高齢者に対し地域サロン等を活用し、自然再興や健康につながる問題としてアピールできるのでは。例えば高齢者向けの紙芝居は、短い時間の中で視覚的にもすごくわかりやすく訴えかけることができる。

ネイチャーポジティブについては、市内の桜の木も古くなってどんどん倒れている状況で、さやま環境市民ネットワークでも毎年クビアカツヤカミキリの調査を実施している。木が古くなって倒れてしまうことは自然の摂理であり仕方ないところはあるが、無くなるだけではなく回復・再生させることも必要だと感じる。

委員 狭山台中央公園では、子どもたちを対象に「ほんきっこ」という、水や泥などの自然の中で遊ぶグループがある。自然に親しみながら育っていく、そのような子どもたちを増やしていきたいと考えている。昔は遊びの中で生活力を育

んでいた。将来を担う子どもたちに、そういう機会を、行政としても目を向けて取り組んでほしい。

委 員 子どもとの会話の中で CO₂ 排出量の話が出るほど、子どもたちは環境に関心を持っている。会社でも若者より年配の方が増えてきている現状があり、高齢者の協力も必要だと思う。

委 員 改定版の作成に合わせ、リーフレットのような媒体も作成する予定はあるか。
事務局 8 ページ程度の概要版の作成も併せて進めている。

委 員 計画を市民に手に取っていただくということは、実際に手に取って読んでほしいのか、WEB 上で公開するのか、どのように想定しているか。

事務局 いきなり本編を手に取っていただくことは難しいと考えており、概要版を計画の入門編として、イベント等で配布し PR できればと考えている。また、実際は現物の冊子よりスマホ等の媒体で見る機会が多いと想定しており、ホームページに掲載した場合にも見やすいように作成したいと考えている。

委 員 見やすく作ったとしても、多分興味のある人しか見ない。概要版が 8 ページとのことだが、それでも興味のない人は読まないのではないか。リーフレット 1 枚、せめて 2～3 枚ぐらいでないと、読んでいただくことは難しいと思う。興味のない方に見ていただくとなると、環境イベントの際に配布しても、環境に興味のある方しか目にしないので、市民会館でのイベントや既存の市の行事など、少しでも目にする機会を増やすことが大切。そこで本当に読みやすいものであれば、興味のない方も手に取っていただけるのではないか。わかりやすく図や矢印等で視覚に訴えるレイアウトにすると、わかりやすいと思う。国の方針などカタカナの言葉が登場するが、適宜日本語に置き換えるなどキャッチーな表現を取り入れて、興味を引く工夫も必要ではないかと考える。一番大切な事は目的であり、何のために取り組むのか。今一番関心があるのは温暖化だと思う。毎日熱中症など報道されていることもあり興味があると思うので、気温上昇を食い止めるためにごみを減らす、自然を大切にするなど、行動のきっかけとなる動機づけをしっかりと訴えかけないと、興味を持ってもらえないのではと思う。

委 員 小学生対象で言えば、宿題の自由学習に使えるような冊子など、普段の行動につながるような媒体があれば、より間口を広げることができるのではないか。人に言われたからやるのではなく、環境活動に自発的、能動的に参加することが大切だと考える。子どもたちを通して保護者も参加することで、盛り上がりが大きくなる。

委 員 環境に関心のない市民にまず計画を手に取ってもらうことは、一番難しいことではないかと思っている。子どもや高齢者という世代だけでなく、ある程度成熟してきた学生へのアプローチにも取り組んでいきたい。今の学生はコロ

ナ禍の影響もあり、自発的な活動の発信は難しいかもしれないが、テーマを与えて会話すると一生懸命取り組む姿が見られる。やはり、環境をテーマにすると出にくいこともあるが、参加してみたら環境のこともわかる講座だったというような工夫をすることで、市民への広がり方が変わってくるのではないかと思う。

委員 ごみを燃やすことで CO₂ が排出される。限りある資源を燃やすことはもったいない。それを実践できるのは、暮らすという事で生活の場すべてが実験と捉え、日々ごみの減量に取り組んでいる。狭山市の生ゴミバケツも 20 年間利用している。ならねばならない、こうあるべきではなく、より良い生活を探したいと考え、さやま環境市民ネットワークの会員として活動している。

お米や円安による輸入の問題をはじめ、日本は食料自給率が低く、多くの食品を輸入している。そんな中、地域には空いている農地がたくさんある状況。もっと自分たちの食材、土を大切にしていって地産地消が進んでほしい。

また、個人の行動と、団体との連携やイベント等に参加できるシステムが行政にあると、市民活動もより広がりを見せるのではないか。

(3) その他

次回の狭山市環境審議会の開催時期について、事務局より説明した。

5 閉 会

会議資料（配布資料）

- ・ 狭山市環境審議会委員名簿
- ・ 2026 年度版（2025 年度実績）狭山市環境レポート
- ・ 狭山市環境基本計画一章
- ・ 第 3 次狭山市環境基本計画改定版スケジュール
- ・ 第 3 次狭山市環境基本計画改定版素案